

キリストが来られたのは

待降節第三主日を迎えました。この期間、多くの方は教会学校が毎年つくっているアドベントカレンダーをつかってくださっていると思います。わたしも子どもの頃は、これが本当に楽しみで毎日、ひと枠ずつ開けながら「もういくつ寝ると～♪」みたいな感じでクリスマスを待ち望んだものです。まあ、それはプレゼントがもらえるという子どもならではの現きんな喜びと、やはり教会のなかにあふれる特別な祝祭の雰囲気を楽しめたのですね。いまはどうかと言いますと、あまりはやくクリスマスは来ないで欲しい、取り次ぐべき御言葉をくださいという、牧師という働きに召されたがゆえの光栄な苦勞に与っています。いずれにせよクリスマスといい、イースターといい、そしてペンテコステも、キリスト教の三大祝日といわれ、教会暦を区切るこれらの祭りのまえに、かならず備えの期間が置かれていることの意味を思わされます。最近はあまりありませんが、礼拝のまえに騒がしいなと感じることがあります。五分前になったら静かに聖書をよむか、祈ってほしい。週報に、礼拝に備えている人の邪魔をしないでください。日常のスピードのまま礼拝に突入しないように、と書いた文章をお読みになったことがあると思います。神の出来事、御言葉を通して示されることに聴き従うには、チューニングが必要だと思うのです。だてに神がイスラエルに安息日をおいて一切の労働を禁じたわけではないのです。あなたがたは日常から離れよ、手のわざをやめて、静まってわたしが神であることを知れ。聞け、イスラエルよ、この順番ですね。いきなりクリスマスではない。クリスマスの前には心を整えるアドベントが、イースターの前には40日間の受難節(レント)が、そしてペンテコステの前には50日という期間が置かれているのです。それぞれの祝祭日にあらわされたキリスト・イエスの、わたしたちのための働きを見つめ、祈

りつつ、神の御業が起こされる出会うの時を待つ、そうして初めてイベントとしてではなく、神が起こされる出来事としてクリスマスに、イースターに、アドベントに向かい合うことが許されるのではないのでしょうか。心備えの時として、アドベントカレンダーを通して、その日を一日一日、数えながら「待つ」、身を整えてゆく。この待つ姿勢が整えられることこそが、到来・再臨を意味するアドベントに求められている姿勢なのだと思います。

今朝のペテロの手紙に「神の恵みの善い管理者」という小見出しがついており、キリスト・イエスの苦難から説き起こして、わたしたちキリスト者の日常生活が変化してゆくことの大切さが語られているのも、これと無関係ではありません。無関係どころか、洗礼を受けてキリストに結ばれ、キリストの身体である具体的なからだである半田教会の一員とされたあなたの歩みが、キリストの身体に接続される前とそれ以後でまったく変わらないというのであれば、あなたは神の恵みをどのように管理しているのかということが、この手紙から問われているのです。3章18節にこうありました。「キリストも、罪のためにただ一度苦しみました。正しい方が、正しくない者たちのために苦しまれたのです。あなたがたを神のもとへ導くためです。キリストは、肉では死に渡されましたが、霊では生きる者とされたのです」、4章1節「キリストは肉に苦しみをお受けになったのですから、あなたがたも同じ心構えで武装しなさい。肉に苦しみを受けた者は、罪とのかかわりを絶った者なのです。それはもはや人間の欲望にではなく神の御心に従って、肉における残りの生涯を生きようになるためです。かつてあなたがたは～」とペテロは語っています。キリスト教は十字架をシンボルとする宗教です。それはわたしのためのキリストの死を救いと信じるからです。一瞬で死に至らしめず苦しみのさまを見世物にもされるもっとも残酷な死刑の道具であった十字架に、神の子がかけられたということの意味

は、そこでわたしの罪がキリスト・イエスによって呑み込まれたということです。パウロの言い方にならえば、わたしの罪はキリストの十字架にキリストと共に釘付けにされ、処理された。こうしてキリストは死んでわたしたちの一切の背きの罪を葬り去ったのです。洗礼をうけてキリスト者になった者たちは、自分が偉いから、キリスト者になったのではありません。イエスさまは何と語っておられたでしょうか。

「丈夫な人に医者はいらない。いるのは病人である。わたしが来たのは正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

わたしたちはキリスト・イエスに出会ったことで、自分自身の中にある神様に対する背きの罪、御言葉に従うことのできない見当違いな生き方、自分自身を神として生き、人を裁き、世界を自分に取り込んで生きようとするあり方に終止符を打ったのです。神さまから、この主イエスの十字架を自分の罪の死と受け止めたがゆえに、キリストと信じて洗礼を受けて、この方に結ばれる。そしてこの方の死において、わたしの罪が消滅したのだとしたら、この方の復活もわたしに関わる出来事として必ず起こされます。ペテロが天に蓄えられている生き生きとした希望として語ったのはそれです。この恵みの出来事から、わたしたちのその後の歩みが照らされる。鏡の前に立たなければ自分の姿がわからないように、わたしたちはキリストの前に立つことなしには自分の姿がわからないのです。毎週の礼拝は、あなたの霊の状態を顧みる鏡です。この鏡は十字架のキリストの形をしています。つまり、すでにキリストの死によってあなたの罪は帳消しにされ、神から罰せられることはないと知らされています。ですからわたしたちは自分を隠すことも、偽ることも、うつむく必要もありません。わたしは罪人ですが、キリスト・イエスのゆえに罪赦された罪人として神の御前に立つことができます。そこで初めて自分のありのままの姿を見つめ、そこから神の願われ

るところへ向かって歩みだしてゆく。キリスト教では義と認められて聖化とよばれる自分の十字架を負ってキリストの御足の後を歩む道が始まります。ペテロは救われる以前についてこう述べました。「かつてあなたがたは異邦人が好むようなことを行い、好色・情欲・泥酔・酒宴・暴飲・律法で禁じられている偶像礼拝などにふけていたのですが、もうそれで十分です」。わたしは5年前に心臓にステントをいれてから病院通いが定期になりました。そのときに軽い糖尿病も発見されましたので以来、毎朝薬を飲むのが習慣になりました。ほぼ二ヶ月毎に医者に通って血液検査をし、データをみながら食生活を始めとした生活面のチェックをして頂いています。体のメンテナンスは、神様から与えられた働きを健全に果たしてゆくために必要なことです。おそらくわたしと同じように多くの方が医薬の世話になっておられるでしょう。分かりやすい例としてあげていますが、では身体のメンテナンスは何のために行うのですか。暴飲暴食のためですか？そうではないでしょう。身体を健康に維持すること、あるいはこれ以上悪化することをふせぐことは、それによって神様から貸し与えられてる一度限りの、二度と繰り返すことの出来ないキリストに贖われた人生を御心に適った生き方をするためではないでしょうか。キリストにあってあなたは新しく作られた者なのです、これが聖書が繰り返しわたしたちに伝えようとしていることです。地上を仮の宿りとし、天を故郷とする群れの一員とされていること、キリストの教えを自分自身の歩みのなかに生かしてゆくことが、わたしたちのチャレンジとなる。しかし、これを難しいと感じてしまうわたしたちがいることを知っています。ある現代の神学者はこのことを、恵みがあまりに素晴らしく、赦しが完全なために、わたしたちは人生をそのままに続けてしまうと仰いました。だから何も変わらない。中世ヨーロッパのことわざにも、「骸骨を納める」というのがあるのを思い出します。元気なうちは自分の好き勝手に暮らし、死が

間近に迫ってくると教会に身をゆだねる。肉体は快樂にささげ、最期はよろしく願いますと骸骨を神に納めるといふのです。中世ヨーロッパにかぎらず、現代も消費生活への欲求は強く、目をうばう様々な新商品、食べてみたいもの、飲んでみたいもの、所有欲や食欲を刺激するものに事欠きません。救われる以前の生活へと引きずり込もうとする力は強い。先日の教会員の感話を思い出します。半田教会という神の善い畑に蒔かれた種であることは自覚しているけれども、自分自身を顧みると茨のなかに落ちた種のように思われると、その青年は語りました。マルコによる福音書の種蒔きの譬えを引いてのはなしです。種蒔きが畑に出てゆき、風に種を飛ばす。ある種は道端に落ちて鳥に食べられ、ある種は岩のくぼみの溜まった土に落ちて発芽するが根が熱で枯れる。またある種は茨のなかに落ち、芽を出し、成長し始めるがやがて茨にふさがれてしまう。そして善い種に落ちた種は30倍、60倍、100倍の実を結ぶという主イエスの語られた譬えです。種は御言葉であり、4種類の土地の状態はわたしたちの心の状態です。この譬え話で、わたしたちはいつも自分の査定を始めてしまう。そして自分にダメ出しをする。自分の現状に甘んじることを良しとしてしまう。そうではない。わたしたちの心がかちかちの道端のようであったり、岩のくぼみのようであったり、茨の地のようであることが問題なのではないのです。だからこそ、キリストが来られたのですから。わたしたちがキリスト・イエスの十字架に繋がれたのは、そのことによって神のわざが成長してゆく土地にすでに変えられているということなのです。そして、これがいちばん大切なことですが、神さまは日々、わたしたちに御言葉を下さっているということです。神さまご自身が、こうして豊かに御言葉の種を信じる者たちのなかに撒き続けて下さっている。収穫の時を信じて、キリストに繋がれた畑として耕されるわたしたちのなかに御言葉の種を下さっている。半田教会という善い畑と言っ

たのは正解で、半田教会が、というよりも、キリストの血で贖い取られた教会、十字架を掲げる教会は召された者たちの集う場所であり、一人ひとり神の霊の導きによってキリストの内に生きることを願われ、招かれ、こうして礼拝がささげられている。この神の恵みの力を、聖霊の働きに、わたしたちはもっと信頼してよい。罪と戦う力を、立ち返る力を、主は必ず備えてくださいます。今年もアドベントを通して、御子の御降誕に至る時のなかに、わたしたちは身を置くことを許されています。こうして繰り返し、初めの恵みに立ち返ることを許して下さっている神に感謝をし、神の恵みの善い管理者としてともどもに励まし合い、祈り合って歩みたく願っています。

お祈りいたします。